

〈一貫教育がめざすもの〉

関西学院初等部がめざす一貫教育

磯貝 曉成

1. 一貫教育の依って立つ基

西南学院から与えられたわたくしのテーマは、「関西学院の一貫教育」であり、その制度と目標、またそのことから付随してくる関西学院に連なる各学校の変化または影響である。

そのことを受けながら関西学院の場合を見てみると、関西学院とは、それぞれの学校（大学院、大学、短期大学、高等部、中学部、初等部、千里国際中等部・高等部、大阪インターナショナルスクール、聖和幼稚園）がそれぞれの歴史と特性を有しながらスクールモットー（関西学院のスクールモットー“Mastery for Service”は「奉仕のための練達」と訳され、隣人・社会・世界に仕えるため、自らを鍛えるという関学人のあり方を示している）に依る一貫した教育を行う学校であるといえる。

求められている一貫教育の制度について、学院全体に組織的な制度が整っているということではなく、むしろ本来的には形では表現できないものが学院に流れているということである。また、一貫教育全般について、わたくし自身が外部から来て初等部の立ち上げに関係したことから、制度と今後の各校の変化と影響については別に譲るとして、標題に示したように、「関西学院初等部がめざす一貫教育」という切り口でここでは話していくこととする。

まず、関西学院のミッションステートメント（関西学院の新基本構想の構築のもとに制定 2010年）に少し触れておきたい。

社会への窓口となる大学の視点から全学院を視野に入れながら、ミッションステートメントは大きく掲げられた。

「関西学院は、キリスト教主義に基づく『学びと探求の共同体』として、ここに集うすべての者が生涯をかけて取り組む人生の目標を見いだせるように導き、思いやりと高潔さをもって社会を変革することにより、スクールモットー“Mastery for Service”を体現する、創造的かつ有能な世界市民を育むことを使命とします。」

さらにこれを補足する「めざす人間像」として次の言葉が続くのである。

「Mastery for Service を体現する世界市民、世界を視野におさめ、人への思いやりと社会変革への気概を持ち、高い識見と倫理観を備えて自己を確立し、自らの大きな志をもって行動力を発揮する人」

そして、ビジョンが6つ掲げられている。

1. 「KG 学士力」の高い質を保証する
2. 「関学らしい研究」で世界的拠点となる
3. 地域・産業界・国際社会との連携を強化する
4. 他文化が共生する国際性豊かなキャンパスを実現する
5. 一貫教育と総合学園構想を推進する
6. 進化を加速させるマネジメントを確立する

これらの関西学院のめざすものに込められた内容に向かって高等部、中学部、初等部等の各校の教育が続くのである。今回、このような形できちんと全学的に教育の方向性が確認されたのは、学院が大きく組織変革した時期であったからに他ならない。

確かに、一つの学校法人に属する各校が、同時期に設立されたものならば、より具体的に制度や目標の一貫性を示すことは可能であるが、時間を隔てて個々に創設あるいは統合が行われると、各校がそれぞれの歴史を持っているが故に、統一された制度を作るには難しい面もある。ましてや同じ校地内に建てられていなければお互いの交流も難しいのも現実である。

しかし、たとえ各校の校地が離れていても同一法人の下に建てられた学校にはその学校の持つ「らしさ」が自ずと漂うものである。

2008年に開校された関西学院初等部はその「らしさ」をどのように生み出そうとしたかを以下に記してみたい。

2. 学校を開校するのに必要な建学の精神

開校に必要なこととして教員採用、教科書選定、シラバス作成、カリキュラム作成、設備備品、校務分掌組織、担任人事、学則、規則、制服制定などがあげられるが、真っ先に来るのは教育理念であり学校の設立される理由が明確でなければならないということである。

何のために学校を建て、どのような教育を行うのかという「学校の教育構想」すなわち「建学の精神」が先ずあって、それぞれの具体的な教育活動が行われていくのである。

学校の建学の精神を身に付けた生徒・学生を小学生から育てたい。それは幹の太い

学園構想の展開であり、小学校から大学までの学校教育16年間の一貫教育のメリットを最大限に活かすために小学校を設立するというものである。

言うなれば建学の精神をどのように具体的にその成長段階（小学校）に展開するかにある。

ここで、初等部の設立趣意書と教育基本構想を以下に示す。

「関西学院の創立者であるアメリカ人宣教師ウォルター・ラッセル・ランバスは、もともと父ジェイムズとともに中国上海を中心に医療伝道に従事していました。その後、西日本一帯への伝道活動を展開するなかで、牧師の養成とキリスト教主義に基づく青少年教育のために1889年（明治22年）に関西学院を創立しました。

世界中の国と地域の人々への医療活動と教育活動に生涯をかけたランバスの壮大なビジョン、熱いベンチャー精神、清冽な愛と奉仕の献身は、今も関西学院の力の源です。続く第4代院長のカナダ人宣教師C.J.L. ベーツが提唱したスクール・モットー“Mastery for Service”（社会と人のために、自らを鍛える）は、現在の混沌とした時代にこそ強く求められています。

関西学院はキリスト教主義に基づく教育を「建学の精神」とし、これまで中等教育ならびに高等教育機関として発展してきました。その伝統と成果を踏まえつつ、幼少期から成人に至る生涯を通じての人間形成に寄与しうる教育機関として、より一層の展開を模索し、ここに初等部設置を計画します。

2008年、関西学院は幼児教育に始まる初等教育・中等教育・高等教育に至る共通の壮大なビジョンを世に問い、改めて関西学院の歴史と伝統から形創られたアイデンティティを強く意識して、本学の教育使命を実現することを推進して参ります。まさに創立者ランバスが示した世界市民（World Citizen）を輩出することによって、本学の独自性を世に問うものです。

関西学院が構想する初等部の設置は、キリスト教主義に基づく高い倫理観、豊かな情操そして国際感覚などを培う、関西学院創立者たちが志したキリスト教主義による家庭の共同体の営みを、より現代のかつ具体的な形で提起するものです。

そのために初等部では、①「キリスト教の教えに基づく、たくましい生き方」、②「豊かな情操と、国際感覚を持った世界市民」、③「真理を探究する、確かな基礎学力」を育てることを基本教育とします。この基本教育を系統立てて学ぶカリキュラムを構築することがこれからの課題と考えます。

児童一人ひとりが神より与えられた個性と可能性を最大限に発揮し、自らの使命と責任、そして誇りを、その幼い思いの中に実現させてゆく、まさに「教育」の本来の課題の実現を目指すものです。

また児童期の教育は、学校生活だけで完成されるものではなく、個々の児童を送り出す家庭、特に保護者との強い連携が必要です。そこで児童を核として保護者自身の学び、人間としての弛まぬ成長のための教育プログラムを、大学・大学院を擁する関西学院の全学的なリソースを活かして、実践する必要性とその重要性も考えられています。

「知・情・意のバランス」、「優れたコミュニケーション能力」、「対人関係における軽快さとセンス・オブ・ユーモア」といった Kwansei Gakuin Personality とでもいふべき豊かな人間性の芽が児童の心に育ち、やがて大学生となり、その精神の熱き担い手としてさらに羽ばたかんことを期待します。」

この趣意書の内容を関西学院初等部の教育構想として下記のように表した。

I. 教育理念

キリスト教主義に基づく全人教育（知性・情操・意志）

—「Mastery for Service」（社会と人のために、自らを鍛える）—

見えないものに心を傾け、

夢を育む学校

—一人ひとりが自分の生きる意味を夢に託し、その夢を実現させる志を育てる—

II. 初等部聖句・讃美歌

「幼子はたくましく育ち（意志）、知恵に満ち（知性）、神の恵みに包まれていた（情操）」

ルカによる福音書 2 章 40 節

Ⅱ 144 番（澄み渡る大空に）、Ⅱ 189 番（丘の上の教会）

III. 初等部校歌 「空の翼」

IV. 教育目標

1. キリスト教の教えに基づく、たくましい生き方の育成（意志）
2. 豊かな情操と国際感覚を持った世界市民の育成（情操）
3. 真理を探究する、確かな基礎学力の育成（知性）

V. 児童像

（意志）① 家族・学校・地域社会で自らの役割を担うことのできるたくましい心身と、

② 高い倫理観と自律の精神を備えた児童をめざす

（情操）① 文化芸術を理解する目と感性豊かな感動する心を持ち、

② 世界に目を向けることのできる国際性を備え、

③ 自然と世界との調和にも意識を向けられる児童をめざす

- (知性) ①聴く力と読む力を培い、
②自分の考えをまとめ表現する力を磨き、
③科学的・論理的に物事を考えられる確かな学力を修得する児童をめざす
- キリスト教主義に基づく、知・情・意のバランスの取れた人間教育によって
世界市民（国際感覚、情操・倫理観、基礎学力）として、一人ひとりがたくましく生きる力を身につける
「家庭・保護者」と「学校・教職員」とによるハンドメイド・テラーメイドの初等教育

そして、この建学の精神から導き出された初等部の教育方針そのものをすべての教育活動に落とし込んでいくことによって、学院としての一貫教育が具現化されていくのである。

3. 一人ひとりのたましいの育ち

一貫教育とは、その学校の精神を学校に通う児童・生徒・学生のそれぞれの成長段階に応じて、問い続けることに大きな意味がある。たましいの部分にこそ一貫教育は大きく問いかけていくのである。

建学の精神ともいうべき学院の精神を担うたましいが育つには、一人ひとり長さの違う時間が必要である。同時に、精神は知識の領域にあるのではなく、感得する世界に依ると考えるが故に、生活と学習が同次元にある初等教育のレベルからその実践が強く求められているのである。

関西学院が、新たに小学校を世に問うたのは、小学校から大学までの16年間をかけて一人ひとりに与えられている「たましい」の育つ歩みを取り戻すためである。

人は誰でも「自分が何のために生きているのか」を考えるが故に、自分もまた夢を持って生きたいと願うものである。生きるとは、一人ひとりが自分の生きる意味を夢に託し、その夢を実現させようとする「こころざし」に目覚めていくことではないか。初等部は、一人ひとりの児童の夢を育むことから学院の一貫教育のスタートラインとして始まったのである。夢を育てる教育とは、趣意書にある『児童一人ひとりが神より与えられた個性と可能性を最大限に発揮し、自らの使命と責任、そして誇りを、その幼い思いの中に実現させてゆくこと』である。このことがまさしく学院の教育活動の基に流れていることが重要である。

4. 関西学院大学生と初等部生との一貫教育の具体的実践

(1) 中等・高等教育の悩み

小学生の時期は生活そのものが学習そのものと言って良いだろう。一方、大学では本人の生活と研究が別建てで進行することは可能である。しかし大学においてさえ、以前ほど単純でない所に現代の教育問題が生じている。その間の中等教育段階では、生徒への生活指導なくしては学習指導が難しい場面がある。確かな学力を用いる豊かな情操や主体性が、十分に育まれていないのが現代の日本の中等教育学校の悩みでもある。

人は何のために生きるのか、自分は何のためにここに居るのかという自分の実存を問う問いかけを聞かなくなって久しい。むしろ仲間の中で自分はどう思われているかに汲々として、傷つきやすい心に悩んでいるのが今の若い人たちの姿だろう。一人ひとりが心の奥底の自分に出会う機会が避けて通られているようである。



一貫教育の実践の場として毎朝行われる礼拝

(2) 考え方の基となるたましいの有り様

一貫教育とは、単に幼稚園（保育園）・小学校・中学校・高等学校・大学（大学院）・インターナショナルスクールとの間にスムーズな連携がとられていることを意味することではない。また、互いの学校がさまざまな制度、行事、局面において共通性を求めることや相互乗り入れを行うことだけでもない。それらは一つの方法であり、一貫教育の手段に他ならない。



初等部の授業に参加する大学生

重要なことは、各学校間をスムーズに連携させることが一貫教育の目的ではなく、それぞれ形が違っていても、その一つひとつのことがらが建学の精神から導き出されるスクールミッションに根ざしているかどうかということである。

順序として大切なのは、先ず心の準備（religiousとしての徳育）が行われることである。

それぞれの発達段階に応じたそれぞれの準備が必要だが、初等教育の時代に特に心の準備がなされることにより、これから起こるさまざまな困難に対して、その困難を生き抜いていく勇気が培われるのである。

「周りに合わせて生きていくことにもう疲れたという、ある学校の小学生の女の子、生きる意味は何、と問うその叫びに何と応えるか。」「わたしは、ここにいてもいいのと眩く子どもに、どのように応えるか。」「厳しい現実が立ちはだかっている。その厳しさを知った者は、その現実屈していくのか。それならば屈しない強い者のみが生き残っていくことになるが。」

このような問いを言葉少なく問いかける子どもたちも少なからず社会にはいる。しかし一方、恵まれた環境の中に居る大多数の子どもたちも、やがて一人で歩きだし、それぞれがさまざまな逆境に出会い試されていく。これから出会うであろう現実の試練に押しつぶされないたくましい心を、幼いたましいに語りかけることによって培うのが、関西学院初等部の毎朝行われる「礼拝」である。現実の厳しさを知ったとしても、それだけでは終わらない道のあることを信じるこそが、新しい世界への出会いに導いて行くのである。心の準備とは、これからを信じて歩いていくたくましい心

を育むことである。このことを毎朝の礼拝のメッセージとして、教師と児童とが共通の場で聞き、共に生活の中で実践していこうとするのが初等部の一貫教育の実践の場である。このことは中学校、高等学校、大学でも同じように礼拝という時と場において行われているのである。

(3) 明日を信じるたくましい心の育ちの具体化

中等・高等教育で行う知識理解のレベルではなく、生活体験の中で建学の精神に接し、体で感じていくのが初等教育時代の一貫教育の形である。

その心の準備の具体化の一つとして、特に関西学院大学体育会の各クラブ所属の大学生と初等部生との授業連携を紹介する。本学では小学生とこの大学生との授業のコラボレーションから関西学院の新しい一貫教育のダイナミクスが生まれる可能性を現在感じている。関西学院初等部（2009年度4学年360名）のさまざまな授業・行事に関西学院大学体育会の大学生がクラブごとに年間延べ人数として300余名が参加している。体育会だけでなく他の分野の大学生を含めると年間400名余りの大学生が、自分自身の生き方を通して小学生に語りかけているのである。その教育の良さは本物に出会うことの感動とその感化力にある。知識を通して知るのではなく、その人を通して知る（生き方に倣う）魅力が人の心を動かすのである。

子どもたちが、大学生が自ら選んだクラブ活動に打ち込む姿勢とそのレベルの高さに接することは、教科書を通しての知識では得られないものである。人と人が出会い、織りなすことから生まれてくる感動がそこにある。そして、その大学生は紛れもなく関西学院の精神を担った学生であるところに大きな意味がある。初等部の毎日の礼拝や授業そして行事の中で語り教えられる内容が、大学生を通して具体的に生き生きと伝えられていくのである。

日々の学校生活の中で、学校の精神が具体的に実践されていることを体感し、体得した者が、ここからさらにその学校の担い手となり、その者の存在が学校そのものを変えていくのである。このことが学院の精神を継承する一貫教育と言える。そして総合学園が行うことのできることである。